

# 保育者をめざす学生に必要な仏教の生命観 「いか せいのち」の保育について

著者	佐藤 達全
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	25
ページ	201-222
発行年	2020-03
URL	<a href="http://doi.org/10.24791/00000862">http://doi.org/10.24791/00000862</a>



## 保育者をめざす学生に必要な仏教の生命観

——「いかせいのち」の保育について——

佐藤 達全

### 1、はじめに（保育者を目指す学生の意識変化）

種々の議論が積み重ねられてきた幼児教育・保育の無償化が始まった。その一方で、保育の質を上げる議論も行われて対応が進められている。しかし、最近の保育科の学生（ここでは、筆者が勤務する短大の学生を指す…以下特に断りのない場合は同じ）に目を向けると、いわゆる〈大学全入時代〉と言われるなかで、保育者をめざす学生の「質」（意識）が大きく変わってきたことに不安を覚えずにはいられない。

保育は「乳幼児の生命を保護する」とともに、長い人生を自立して有意義に生きるための土台作りをする営みであるから、「へいのち」とはなにか」「人間とはどんな生き物か」「人はどう生きてらよいか」という本質的な問いに基づいた、生命（乳幼児の生命はもちろん、保育者自身の生命も）に対する深い洞察が必要なことは言うまでもないであろう。その理由は、保育者は乳幼児が成長する際のモデルとして彼らと応答的に関わらなくてはならないからであり、保育

者の全人格が乳幼児の前に残らず顔を覗かせるからでもある。

ところが、保育科に入学してくる学生と接して感じることは、手っ取り早く「職場で使える」と考えている〈How to〉的な知識や技能には関心を示すものの、保育者という存在が「乳幼児の心身の成長に大きな影響を与える」人的な環境としての存在であるという意識をほとんど持っていないのではないかとということである。もちろん、入学して間もない学生にそこまでの認識を求めるのが酷なことは承知しているが、以前（おおよそ、平成になる前）の学生の多くは、保育者になるための専門教科の学習が始まると、「保育における保育者自身のあり方がどれほど重要なものであるか」に気づいて、学習態度だけでなく日常生活への取り組み方にも著しい変化が見られた。

最近はどうかというところ、残念なことに2年の在学期間（筆者の勤務校は短期大学のため）の半分が過ぎても、そのことに気づかない学生が多くなったように感じられる（気づいている学生がいまいけではないだろうが、それが日常の言動につながっていない）。例えば、筆者の勤務校では1年次に幼稚園と保育所で1回ずつの観察実習を行うが、あくまでも「観察」という意識にとどまっただけで、主体的に（問題意識を持って）取り組む学生は多くない。そのため2年生の新学期が始まった際に、観察実習について尋ねても、「することが多くて大変だった」「先生がとても忙しそうだった」「かわい子どもと遊べて楽しかった」といった中学生の体験学習レベルの主観的で情緒的な感想が続出する。

観察実習は2年次の「担任実習」（責任実習）につながる重要な意味を持っているのであるから、子どもの活動や先生の援助・言葉かけを「ただ観察していればよい」のではなく、「子どもがなぜ、そうした行動をしたのか」「子どもの思いはどんなだったか」「一日の活動には、先生のどんな意図やねらいがあったのか」「先生はどんなことに配慮しながら活動を展開していたのか」といった問題意識や掘り下げが必要ではないだろうか。それが短大生の実習のほうである。それにもかかわらず、そのような意識をもちながら活動する学生はほんの一部でしかない。その理由は、批判を受けることを予測しながら極論すると、「保育というのは、かわいい子どもと毎日楽しく遊んでいるお仕事」程度

に思いこんで入学してくる学生が多くなったからではないだろうか。

それを裏づけるかのように、「保育原理」や「教育原理」「子どもの発達心理学」「子どもの保健」等の（乳幼児の本質や発達のプロセス・生命を保護するための医学的な知識等の習得を目的とした）理論的な教科に対する関心は極めて低く、期末試験後の再試験対象者も非常に多い。その一方で、単位が修得できなければ卒業や免許取得に影響が出かねないので、再試験は同じ問題でお茶を濁したりテキストの持ち込みやレポートに代えて合格点に達するように「工夫」したりする教員も少なくない。このような状況では、幼児教育（保育）の本質や方法について学生が十分に理解することなど期待できるはずがない。

そして、それは当然ことながら保育の質の低下につながるであろう。もちろん、新入生に対する学習の仕方や日常生活に関するガイダンスは、以前に比べると格段に懇切丁寧で具体的な内容で行われていることは言うまでもない。それにもかかわらず、「全入時代」の学生の格差があまりに大きくなったため、そうした説明が理解できない学生も少なくないのが現状である。

そのため、ここ数年は新年度の授業が開始されて早々に「思っていたことと違うので退学したい」と、申し出る学生が後を絶たない。そして、こうした状況は理論的ないわゆる座学だけでなく、ピアノ等の実技科目でも顕著になっている。以前は小中学生の頃からピアノを習っていた学生が少なくなかったが、最近は未経験者が増えている。もちろん、入学の条件に「ピアノの経験は問わない」ことが明記されており、初心者であっても入学してからしっかりと練習すれば（そのために、ピアノのレッスンは能力に応じたクラス分けを行って対応している）保育者として必要な技術を十分に習得することはできるはずだが、問題は「保育現場で必要な技術を習得しようとする意欲」の極めて低い学生が増加してきたことである。というよりも、問題は保育活動における「ピアノ等の楽器演奏技能を習得する意味や必要性」が理解できない学生が増えていることである。

筆者が勤務する短大では、最初の実習（幼稚園の観察実習）が1年生の後期（11月）に行われる。これは観察実習のため、すぐにピアノの技術が求められるわけではないが、観察実習の半年後には「責任実習」（担任実習）が予定されているため、そのときに向けた「慣らし」の意味で自分から申し出ることができるだけ多くの「部分実習」をさせていただくように指導している。ところが、実習指導の保育者から「ピアノを弾いてみませんか」（紙芝居や絵本の読み聞かせ・手遊び等も含む）と言われるまで、自分から申し出る学生が次第に減少しているようである。その理由は、ピアノの演奏に自信がないだけでなく、消極的な性格で指示を待つだけという学生が多くなったからである。

中には「弾いてみませんか」と言われた際に「いいです」と断る学生がいることも報告されていて、実習担当の保育者がその理由を聞くと「観察実習だから、しなくてもいいんです」と答えて（短大の授業「実習指導」では、積極的にさせていただくように指導しているのだが）、響感を買った学生が何人も存在する。それでも、1年生の観察実習ではなんとか苦手なことに背を向けていられるが、2年生の担任実習が近づいてくると精神的に追いつめられるためか、幼稚園教諭の免許や保育士資格の取得を辞退する学生がここ数年は年間で10名を超えるようになってしまった（筆者の勤務する短大の入学定員は240名で、入学時には毎年、ほぼ定員を充足している）。

こうした状況を見ていると、保育者を希望する理由が、やはり「かわいい子どもと毎日楽しく遊んでいるお仕事」という意識レベルだったのかと残念な思いになってしまう（ただ、高等学校の先生に生徒の適性を踏まえた進路指導を期待しても難しいであろう）。しかし、その原因を学生にだけ求めるのは適切でない。少子化が進んで、家庭でも学校でも「王様」として必要以上に過保護に育てられてきたことも、そうした消極的な取り組み方の学生を増加させる原因になっているのではないだろうか。さらに、学生がこのような態度を示すのは、現在の日本社会の姿を反映しているのではないかと考えざるを得ないのである。

## 2、学生の変化の背景を考える

### (1) 少子化と学力低下

そこで、このような学生が出現する背景を考えてみたい。現在の日本は少子高齢社会である。そして、少子化が進んだために高校や大学（短大）への進学が容易になった。進学率の上昇に伴って上級学校の新增設が進んだが、少子社会になっても、高等学校や大学（短期大学）の数はそれほど減少していない。「数学が0点でも公立高校に入学できる」という話題が新聞に登場したのがいつだったのか記憶にないくらい前のことであるが、それと同じことは大学にまで及んで「大学全入時代」と言われるようになった。そして、『分数ができない大学生』という衝撃的な書籍が出版されて大学生の学力低下に対する論争が始まったのは今から20年前の一九九九年である。（註1）

それ以降、「アルファベットが言えない（書けない）大学生」「漢字が読めない（書けない）大学生」「正しい日本語の文章が書けない（話せない）大学生」等、大学生の学力論争が盛んに展開されているが、中には「大学に生徒が在籍している」（大学には本来、「学生」がいるはずなのだが、中学生・高校生並の学力や意識の大学生が増えていることを意味している）といった内容の論文まで発表されるようになった。

たしかに、少子化は高校や大学への入学を希望する受験生の倍率低下に影響を及ぼすので「大学全入時代」といった現象にもつながるだろうし、それが学力低下を引き起こすことにもなるだろう。しかし、ここで、そうした議論をいくら繰り返しても問題の解決にはならない。筆者が勤務する短大の学生が、なぜ「保育者に求められている知識や技能の習得に意欲を示さないのか」について考え、その対応を検討していかなければ保育の質を上げる（保育者の質を上げる）ことにならないからである。

忘れてならないのは、「学ぶ」ということに対する意識の変化である。そこには「何を学ぶか」「何のために学ぶの

か」を考えるよりも「大学卒業という」学歴」にあこがれた「古い時代の日本人の心」が今でも生き続けているのではないだろうか。たしかに大学進学者がそれほど多くなかった時代では、「大学を卒業する」ことは、その後の人生に大きな意味を持っていたようである。けれども高等教育が大衆化された現在では、大学を卒業したからといって特別な意味はない。当たり前のことだが、大学で「何を学び何を身につけたか」が重要であろう。そのことに気づかず漫然と学生生活を送っても、その後の人生にどれだけ役立てることができようだろうか。

筆者は10年ほど前に「高等教育の新たな局面」と題する衝撃的な文章を読んだことがある。著者は一九四一年生まれの秋葉英則（大阪教育大学教授）で、そこには次のように書かれていた。

現在、日本の高等教育も新たな局面を迎えています。そして、それとともに、以前の子ども像・若者像とはまったく違う子ども像・若者像が生まれつつあります。

高等学校進学率が99パーセントまで達しました。およそ50年前、私の時分の高校進学率は三五、六パーセントでした。私が大学を卒業する頃は5割に近くなりましたが、それでも進学組・就職組がありました。現在では、高校進学率が驚異的に伸び、大学進学率もほぼ5割に達しています。（中略）

では、現在の大学でどんな問題が起こっているのか？大学生問題の最大の問題は実は低学力ではありません。大学生は分数もできないなんていわれますが、それはこれからお話しすることに比べたら、実に瑣末で一面的なことです。

と言って、秋葉は「最大の学生問題」は「留年」としている。そして卒業できない理由として「きちんとした日常生活が営めない」ことと「勉強しなくてはいけない時に勉強しない」ことをあげている。その上で、自身が勤務している大学の学生について次のように述べている。

恥ずかしながら、わが大学を例に挙げますと、学生は教育実習を経て教員免許を取得します。卒業に必要な必

修単位でもあります。しかし、その実習の単位が取れないのです。(中略)その理由は三つあります。「あいさつができない」「遅刻する」「約束ごとを守らない」。これはわが大学だけのことでなく、全国的にそうなのです。

ここ数年は介護実習もあわせて行われるようになりました。学生は老人ホームなどに実習に行きますが、外部施設なので一生懸命指導してくださいませ。しかし、その学生は遅刻する。ぼーっと指示を待っている。さらに指示されたことができない。指導する施設側からすれば、この学生たちには教師になって子どもを指導してほしくない判断されて、実習で不合格になるわけです。

あいさつする。時間、約束は守る。こんなことを教えるのは大学教育ではありません。

ご両親の段階からの問題なのだと思います。小学校などで「あいさつ運動」なんてやっていますが、あいさつは「運動」であるのではなく、習慣です。「運動」でやっているから、日常の社会生活であいさつができないのです。

このように、家庭でのあり方に対して手厳しい指摘をしているが、このことは、「全国的にそうなのです」という指摘の通りで、筆者が勤務する短大でも同様の学生が多く見られるようになった。<sup>(注2)</sup>

なお、このことに関連して、二〇一九年11月に実施された幼稚園観察実習(1年生)での出来事を紹介しておこう。仮にA子としておく。筆者の勤務する短大では、10年ほど前から幼稚園(11月)と保育所(2月)の観察実習がスムーズにスタートできるように、夏期休業中にそれぞれ3日間の体験実習を実施している。こうしたことを始めたのは、少しでも実習園の雰囲気慣れて観察実習の初日から進んで活動できるようにするためである。この活動を始める前は、実習が始まって、子どもに声が掛けられなかったり園庭で棒立ちになってなんとなく眺めていたりする学生が多く見られたからである。体験実習を取り入れた当初は、それなりの「成果」が見られたのであるが、「全入時代」が進むにつれて、それも難しくなってきた。



A子は夏期休業中の体験実習で実習園（幼稚園と保育所の両方）から問題を指摘されていた学生の一人である。3日間の体験が全うできずに欠席したり（無断欠席＝実習指導では、体調不良等で欠席する場合は、実習園に連絡することの指導をしていることは言うまでもないが）子どもと関わるようすが見られなかったりしたため、受け入れ園からの指摘を踏まえて本人に指導をした上で実習に参加させたのであるが、実習中に巡回した教員に伝えられたのは以下のような内容であった。その一部を抜粋して紹介する。

〈実習担当者の指摘〉「挨拶をする際に目が合わず、自分の考えを表現できないなど、保育者としての前にコミュニケーションの難しいところがある。子どもと一緒にいても近くで傍観するだけで声を出すこともない。実習日誌は約束の時間までに提出できない」

こうした指摘を受けた巡回担当の教員が本人と面談したところ、本人は「楽しい」と言っており、指摘されたことに関して何も感じていない印象を受けたとのことである。

念のため、「どの先生にも目を見てしっかりと挨拶するように指導した。自分から子どもに話しかけるように、そして、どうしてよいか分からない場合は実習担当の先生に質問するように助言したとのことであった。」そうしたやりとりのあった数日後、園からの連絡で決められた出勤時間を5分遅れて出勤したが、何の理由も説明もせず「すみません」というお詫びをすることもなくそのまま保育室に行こうとしたので、時間を取って指導したとのことであった。

巡回担当者が再び実習園に伺ってお詫びするとともに本人に指導を行った。自分の行動の意味が考えられないようであったとのこと。実習終了後に巡回担当者が再び本人に指導をしたが、本人は口をつぐんで下を向いているだけであったとのことである。

あまりに低レベルで「ひどい」例であるが、最近はこのような学生が年々増加している。実習担当者も指摘するよ

うに、保育者としての資質以前の「学生（社会人）としての問題」がありそうな例である。しかも、A子だけでなく、連絡なしに休んだり実習の終了時間になると挨拶もなしに帰ったり期限までに日誌や指導案が提出できなかつたりする学生は、入学生の10パーセントから20パーセントもいるとされる。そのことが、実習が近づく<sup>と</sup>幼稚園教諭免許や保育士資格の「辞退」という動きになっているのではないだろうか。

このようなことに関しては、筆者も以前、次のように指摘したことがある。

近年、大学生（短大生）の学力が大きく低下してきたことが報じられている。身近な学生に目を転じると、学力低下はもちろんであるが、それ以上に学習や日常生活のあり方（家庭における基本的な生活習慣や礼儀作法のしつけ方）に多くの問題が存在しているように感じられてならない。言いかえると、単に学力が高いか低いかという問題にとどまらず、知識を学んだり技能を身につけたりすることに對する意識や日常生活そのものに問題があるのではないかということである。<sup>註3</sup>

もちろん、少子化の中で、親が子どもの教育に熱心になることが必ずしも悪いことではないが、子どもの気持ちを先取りして何でも「言っておけたり、してあげたり」していると、子どもは自分で考えたり行動したりしなくなる。その結果、自分の「いのち」を生きているのは自分だということすら分からなくなってしまうのであろう。自分の「いのち」の姿が分からないために、漫然と生きているのではないだろうか。そこで、こうした問題の解決には「いのち」の教育が不可欠だと筆者は考えている。

このことは、教育人間学が専門の和田修二の次のような指摘からも明らかであろう。

今日わが国の両親たちは、子どもの上級学校進学のために、早期から子どもに對する知識の教授に極めて熱心である。このため、多くの子どもは、学校と学習塾を往復する多忙な毎日<sup>に</sup>追われており、加えて高度経済成長以降のわが国では、人びとの日常生活環境が高度に技術化、自動化され、知識の情報化、視覚化が進んだこと

や、伝統的な共同体が崩壊して人びとが機能的に分化し分断された生活を送るようになったこともあって、子どもの家庭内と地域社会内での直接的な生活経験が急速に貧弱で狭いものになりつつある。

と述べた上でさらに

子どもの教育には昔から「躰」という形で、「手本を見て真似る」、「経験によって学ぶ」という、頭だけでなくからだを用いた陶冶が重要であり、また有効であることが知られてきた。その点で、近年のわが国の教育は、からだを用いた陶冶という意味での「体育」の著しい欠落が起こっていると言つてよい。

と、「身体による活動の重要性」を強調しているのである。<sup>(註)</sup>

大学への進学率がどれほど高くなっても、これでは無意味であるどころか害にしかならないのではないだろうか。

## (2) 都市化と核家族化における「生活体験の不足」の問題

ここで指摘されたような「生活経験不足」の問題の背景にあるのは、都市化や核家族化ではないだろうか。そして、その最も重大な出来事が〈へのち〉の姿がわからなくなってしまったことである。筆者は今から20年近く前に次のような文章を書いたことがある。長い引用だが紹介しよう。

### 〈へのち〉の姿を見つめる…私の宗教教育論…

#### 1 見えにくくなった生命

今は「人の生命が見えにくくなった」と言われることがあります。たとえば、赤ちゃんはほとんど病院で生まれ、寝たきりの状態になった人の多くが、病院のベッドで最期をみとられます。これも、そうしたことにつながるのでしょうか。

私が子どものころは、どこの家でも助産婦さんの助けを借りて家で出産しました。庭で遊んでいた私は、「オギヤア、オギヤア」という泣き声を聞いて急いで家の中にとびこんでゆきました。母の寝ているふとんのそばに座って、赤くてしわくちやの「妹」を不思議そうに見ていたことを今でも覚えています。

八十歳を過ぎて床につくことが多くなった祖母を、家族みんなでお世話しました。食事を運んで行ったり、身体を拭いたりしながら、人が齢をとっていく姿を毎日の生活の中で見ることができたのです。祖母は「ありがたい」と言いながら、私にいろいろな話をしてくれました。

## 2 誕生も別れも感動的

現在では、人の誕生や死は、病院という限られた世界でのことになったのです。農業が中心だった日本が工業化し、農村から多くの人が都会へ移動していきました。核家族化が進み、共働き家庭が多くなりましたから、以前のような形での出産や最期の見取りは難しいでしょう。

家の中から出産や老いや臨終の場面が消えたことは、子どもの目からも「生命の始まりと終わり」が見えにくくなったことを意味しています。

赤ちゃんの誕生は、きわめて感動的なことです。パパやママにとつてはもちろんですが、新米の「お兄ちゃん」や「お姉ちゃん」にとつても、うれしそうなママの表情は忘れられないでしょう。

生まれたばかりの赤ちゃんは、食べることも排泄することも、すべてまわりの人の助けが必要です。パパやママもぎこちない手つきでお風呂にいたり、おむつを替えたりしています。新米お兄ちゃんはちよっぴりやきもちを焼きながら、そんなようすをながめています。

反対に、老いていく人の姿を見るのは寂しいことです。いくら天寿をまっとうしたからといって、肉親との別

れが辛いはずはありません。けれども、別れを悲しんでいるパパやママの姿も子どもの心に何かを強く語りかけているのです。

### 3 効率優先の社会

ところが、工業化した社会では、そんな悠長なことを言うてはいられません。より早く、より大量に生産しなくては競争に負けてしまうからです。そのために現代は、よく働く二十代から五十代の人を中心とする見方が広がっているでしょう。

けれども、働けるかどうかで人を評価することには賛成できません。それは、赤ちゃんであつても高齢者であつても、生命の重さに変わりはないからです。

赤ちゃんが誕生することを「生まれる」と言います。これは文法的に説明すると「受け身」の表現です。つまり「生んでもらった」のです。自分の意思でこの世に出てきた人は一人もいません。

その生命の始まりは精子と卵子が受精した、たった一つの受精卵です。女性の体内で作られる卵子には七百万個もの予備軍がありますが、一生のうちで卵子として成熟するのは、そのうちの四く五百個にすぎないそうです。一方、卵子にたどりつくことができる精子は、一度に放出される二億から三億のうち、たった一つしかありません。ですから、「わたし」という人間がこの世に誕生する可能性は、何兆分の一という小さなものです。

お釈迦さまが「天上天下唯我独尊」とおっしゃったのは、生命がいかにかけがえないものであるかを私たちに気づかせようとしたからでしょう。

### 4 生かされて生きる

かけがえない生命も、永遠に生きることにはできません。「自分の生命」と思っています。終わりの日さえ知ることができないのです。老いることも、病むことも、死ぬことも、自分の思い通りにはなりません。このように考えると、自分の力で「生きていく」のではなく、「生かされている」と考えざるを得なくなります。

赤ちゃんの身体はどうして大きくなるのでしょうか。どうして大人になると成長がとまるのでしょうか。どうして人は老いるのでしょうか。医学や生命科学はめざましい進歩を遂げましたが、私たちの生命はわからないことばかりです。それほど、生命の仕組みは複雑で奥が深いのです。

生老病死は、人間の自然な姿です。お釈迦さまが出家を決意されたのも、その問題と向きあうためでした。

赤ちゃんや高齢者のお世話をすることによって、子どもは生命の不思議さと向きあうことができます。毎日の生活の中に、子どもの宗教教育の手掛かりはいくらでもあるのです。それが、生命を大切にすることにつながるのではないのでしょうか。

（『禅の友』平成13年2月号…曹洞宗宗務庁発行）

昔から「へいのち」は「へいのち」とふれあうことでわかる」と言われてきた。ところが、現在の日本では「ふれあひ」の機会が私たちの日常生活から消えてしまったのである。都市化で生活空間から家畜や野菜などが姿を消し、出産や高齢者の生活は自宅から病院や施設に異動したため、出産や臨終といった人生の大きな出来事が子どもたちの日常生活から離れてしまった。これでは子どもたちが「この世に生命を授かることの感動」や「生命のはかなさ」を感じるなどできるはずがない。

つまり、〈へいのち〉の本当の姿を知ることができなくなってしまったのである。「生きていて当たり前」と思っていて、「今日という一日を生きられることがどれほど有難いことか」などと、考えることもないだろう。その結果、学力

低下は言うに及ばず、これまではあまり見られなかった多くの問題の発生につながっているのではないかと筆者は考えている。数年前に筆者は次のように指摘した。

最近のニュースで驚くことは、殺人や傷害事件を起こした容疑者が「人を殺してみたかったから」と供述しているという報道が目につくようになったことです。

また、子どもたちの会話でも「死ねー!」という言葉が無造作に発せられているように感じます。子どもたちが、本当に相手に死んでほしいと思っているわけではないでしょう。だからといって、相手に対して「死ね!」などと軽々しく言っているわけではありません。(へのち)はそれくらい大切なものです。

しかし、残念なことに、大人でも本当は分かっている人がいるように思います。子どもが虐待される悲しいできごととも跡を絶ちませんし、自分の子どもに「お前なんか生むんじゃあなかつた」と言う親もいるのです。このように言われた子どもの心がどれほど傷つくか、想像したことがあるのでしょうか。<sup>(註5)</sup>

こうした状況に関連して、筆者は人間教育の原点として「仏教保育」の必要性を唱えて「人間学としての保育学」を提唱したことがある。<sup>(註6)</sup>

そのきっかけは、田中孝彦が次のように書いていたからである。

保育という仕事は、一人ひとりの保育者が一人ひとりの子どもに働きかけ、人間として育てていく営みである。保育園全体で保育方針を決めたとしても、その方針を持って一人ひとりの子どもに働きかけるのは、一人ひとりの保育者である。仮に、最初の働きかけだけはみんな決めてきた通りにできたとしても、それに対する反応は、もうすべてのクラス、すべての子どもによって異なる。

それをどう読みとりどう働きかけ返していくかは、まさに、一人ひとりの保育者の判断にかかってくる。保育という仕事は、その本質からいって、個々の保育者の責任が問われる厳しい仕事なのである。<sup>(註7)</sup>

日本のさまざまな地域で、そしてさまざまな年代の人が、これまでは想像もしなかったような事件が次々に引き起こしている状況を知るたびに、筆者は〈いのち〉の本当の姿について現代の日本人（大人も子どもも）がしっかりと学ばなくてはいけないとの思いを益々強くするのである。そして、そのために最も必要な教えこそが仏教の生命観であると考えている。

### 3、仏教の生命観とは何か

仏教というと、特定のドグマ（dogma）＝宗教上の教義・独断的な信条を思い浮かべる人も少なくないのではないだろうか。さらには、その役割は葬式と法事と考える人がいるかもしれないが、そうではない。仏教は〈いのち〉の教えである。仏教というのは「仏陀の教え」を短縮した名称であり、仏陀は Buddha の音訳であり、Buddha は「人間の生命についての真理を発見した人」という意味であるから、仏教がキリスト教やイスラム教などと並べて論じられるものでないことは明白であろう。

それでは、Buddha が発見したとされる「真理」とは何を意味しているのか。それを示したものが「天上天下唯我独尊」という「誕生偈」であり、「三法印」（諸行無常」と「諸法無我」と「涅槃寂静」）である。「天上天下唯我独尊」はゴータマ・シツダールタ（後の Buddha）が誕生した時に言った言葉とされている。もちろん、そのこと自体は後になって構成された「お話」であるが、そこに示された内容は非常に重要である。それは、「この世に存在する誰の生命もたった一つしかない尊いものだ」という意味だからである。仏教の生命観の基本はここから出発している。

しかし、どれほど「かけがえのない生命」であっても、永遠に生きることにはできないし、自分で「終わりを決めること」も「前もって知ること」もできないのだから「かりに明日、終わりが来ても後悔しないように今日を生きることが大切だ」というのが諸行無常の意味するところであろう。



そして、人間でも動植物でも、この世に存在するものはすべて互いに関わりあって存在している（直接か間接か、目に見えるか見えないかはさまざまであるが）のであるから、「自分の都合だけを優先した言動を慎み、自分以外の多くのへいのち」によって生かされていることに感謝を忘れず、思いやりの心で行動することが自己の幸せにつながる」というのが「諸法無我」の意味するところであろう。

さらに、この世で生きていると、さまざまな苦悩に直面することがあるが、この世界の他に望み通りに生きられる世界があるのではなく、「生まれてから死ぬまでが自分の生命なのだから、一日一日が好い日になるよう大切に生きましょう」というのが「涅槃寂静」の意味するところであろう。

このように要約すると、仏教が私たちの生命と真正面から向きあったきわめて合理的で客観的な「いのちの教え」「生き方の教え」で、仏教徒であるか否かにかかわらず、すべての人にあてはまる内容であることが分かるのではないだろうか。そして、この教えは保育者を目指す学生（すでに勤務している保育者）にとっても、さらにはすべての日本人が考えるべき非常に重要な教えであると思われる。

ところが、都市化され核家族化された社会で暮らす現代人にはこうした「いのち」の姿を学ぶ（実生活で体験する）機会が極めて少ない。もちろん、「いのちを大切にするための教育」は学校でも行われているが、これまでは「生にだけ目を向けた生命尊重教育」で、「育ち盛りの子どもに〈死〉のことを教えるなんて縁起でもない」として、「死」ということを意識的に避けていたようで、必ずしも生命尊重の目的が達成できていたとは言えなかった。そのため、子どもも大人も含めた多くの日本人は「死」ということの本質がわからなくなってしまったのであろう。それは、日本女子大学の中村博志教授の調査報告から窺える。

中村は次のように述べている。<sup>註8)</sup>

最近の子供たちは、死についてどんな考えを持っていると思いますか。いまから十年ほどまえのことになりま

すが、金子政雄先生の論文を拝見しました。この論文によると、小学校六年生約三百人に対して「一度死んだ生きものが生きかえることがあると思うか」という質問に、なんと四分の一が「生きかえる」、さらに四分の一が「生きかえることもある」と回答していたのです。

最初はほんとうかなとも思いました。しかし、その後、私も同様な調査を実施してみたところ、二〇〇〇年におこなった都内小学校二校の高学年、約四百名の調査では約三分の一が「生きかえる」、三分の一が「生きかえることもある」と回答しております。「生きかえない」と答えたものは約三分の一に過ぎませんでした。

子どもたちがこのように「死」を認識している状況であれば、「生きることに対する緊張感が生まれるはずもなく、毎日を漫然と生活する」ことになるのではないだろうか。また、自分の〈いのち〉や自分以外の〈いのち〉を傷つけたり奪ったりしても「それほど驚くことではない」のかもしれないし、筆者が勤務する短大の学生が「保育者になる」という目的に向かって一日一日を精一杯努力することも期待できないのではないだろうか。

そこで、学習意欲を高めるために、筆者は10年ほど前から、第1回目の授業で学習内容や到達目標を説明した後で、〈いのち〉についての話を行っている。その内容は、中学校で学習する理科の教科書に示されている程度である。その要点を記しておく。

①この世に生を受けるための受精の確率は限りなく0に近いこと（学生には具体的な数字をあげた方が理解しやすいと思われるので、女性の体内にある卵子は約七〇〇万個で、その内の1個が自分の〈いのち〉になること、その一方で男性の精子は一度に1億から2億放出されるが、その内のたった1個が卵子と受精するので、七〇〇万分の一と1億分の一を掛け算した七百兆分の一が受精の確率と説明する）。

②受精卵は細胞がたった一個だが、母親の胎内で過ごす約十か月の間に六十兆個という膨大な数に分裂して赤ちゃんの身体が形成されること。ただし、その細胞分裂がすべて順調に進むとは限らず、心身に「障害」が生じるこ

ともあること。

③世界中で自分の〈へのち〉はたった一つしか存在しない尊いものであること。

④だれの〈へのち〉も「オンリーワン」であり、他人の〈へのち〉と比べて序列がつけられないこと。

⑤それほど尊い〈へのち〉であっても、いつか必ず「終わり」が来ること。しかも、その終わりを自分で決めることも、前もって知ることもしできないこと。だからこそ、「今」というこの瞬間を精一杯に生きることが大切であること。

⑥自分の〈へのち〉は、自分以外の〈へのち〉（人間はもちろん、動物や植物の〈へのち〉も含まれる）ともつながって生かしていること。地球上に動物や植物が存在しているおかげで人間の生活が成り立つこと。私たちは一人では生きられないこと。

⑦つまり、私たちにとつて最も大切なことは、終わりの時が来るまでの時間をどのように使うかであること。

こうした話は「誕生偈」や「三法印」「縁起」といった仏教の基本的な生命観に基づいたものであるが、筆者が勤務する短大が仏教系でないため、仏教用語は一切用いていない。さらに、保育科の学生が対象であるため、保育という言葉は子どもの〈へのち〉を保護する意味の「保」と将来の自立した生活のために教育する意味の「育」をつなげた表現で、保育者を指す学生は〈へのち〉についての学習が大切であると説明しておいたので、一人残らずメモを取りながら熱心に聞いていた。なお、保育系の専門科目の授業は厚労省の指示で一クラスの人数が五十人以内で行っていることも集中しやすい環境であると思われる。

そして、その話を聞いた感想を（自宅で書いて）翌週の授業を始める前に提出してもらおうのであるが、そこには毎年期待していた以上の内容が記されている。それを集約すると次のようである。

①これまでは〈へのち〉について考えたことがほとんどなかった。

- ②話を聞くまでは、この世に生きていることが当たり前だと思っていた。
  - ③この世に生まれる確率がこんなに小さいとは思ってもいなかった。
  - ④〈へいのち〉の大切さに気づいた。
  - ⑤自分の〈へいのち〉が一つしかないことを改めて実感した。
  - ⑥〈へいのち〉に「終わりがあること」や「終わりを自分で決められないこと」に気がついた。そして、自分の気持ちの変化を、
  - ⑦自分がいつ死ぬか分からないので、一日一日を大切にしようと思った。
  - ⑧自分を産んでくれた両親に感謝しようと思った。
  - ⑨自分のことだけでなく、他人の〈へいのち〉も大切にしなければならぬと思った。
  - ⑩保育者として子どもの〈へいのち〉をしっかり守ろうと思った。
  - ⑪子どもにも〈へいのち〉の大切さを伝えようと思った。
- などと述べていて、期待した以上の反応が見られる。特に驚いたことは、中には話を聞きながら涙ぐむ学生がどのクラスにも数人いることである。恐らく身近な人の「死」を思い浮かべたのではないだろうか。

#### 4、保育者として学びたい「いかせいのち」ということ

こうした試みに対する学生の反応が期待した以上であったことから、筆者は現在もそれを続けている。それを通じて感じるのは、現代の学生がいかにそうした〈へいのち〉について考える機会がないかということである。家庭でこのようなことについて話した経験のある学生は一人もいなかった。現代は核家族化が進んだ結果、高齢者と生活をともにすることが少なくなっており、子ども時代に老いた人と接することや臨終に立ち合うこともない。一方で出産はほとん

どが病院で行われるために、子どもたちが〈いのち〉の誕生という節目に出会う機会がなくなってしまった。さらに都市化が進んで、動物(家畜)や植物(作物)とふれあう機会も得られないのではないだろうか。

それだけに、日本仏教保育協会が掲げている「いかせ〈いのち〉の保育」の役割が重要になる。そこで、最後に仏教の生命観に基づいて〈いのち〉を生かすことについて重要と思われる二つの視点から整理しておくことにする。

(1) 他者の生命を傷ついたり奪ったりしないという視点

一般に、生命尊重という場合に誰もが最初に思い浮かべるのは「自分以外の生命を傷ついたり奪ったりしない」という視点であろう。これは、なぜかとその理由を聞かれても答えに困るほど明白なことである。それゆえ、どこの法治国家においても他者の生命を傷ついたり奪ったりした場合は、法律に基づいて罰則が科せられている。

(2) 自分の生命を傷ついたり死に至らしめたりしないという視点

二つめは、自分の生命を大切にすることである。他者に対する場合と同様に、自分の生命を傷ついたり死に至らしめたりしないことも、生命尊重ということに変わりはない。ただ、自分の生命を傷つけたからといって他者の生命を傷ついたり奪ったりしたときのように罪に問われることはないし、仮に自分の生命を抹殺したからという理由で殺人罪に問われたとしても、罰する対象がこの世に存在しないのであるから罰しようがない。

(3) 動物や植物の生命を傷ついたり奪ったりしないという視点

このことに関しては明確な罰則を設けている例はあまりみあたらない。もちろん、倫理的な考え方として動物だけでなく植物をも含めた「生命尊重」が広く受け容れられていることは否定できないが、人間以外の「生きもの」に対する生命尊重意識は東洋と西洋によって、さらに宗教的な価値観(例えばキリスト教と仏教の生命観)によって大きく異なっていることが指摘されている。<sup>(註9)</sup>

このように、一般的な生命尊重の思想は大切なことだが、筆者はそれを「消極的な生命尊重」と考えているが、今、<sup>(註10)</sup>

「私たちに必要なことは「積極的な生命尊重」ではないだろうか。そして、それこそが日本仏教保育協会で掲げる「いかせいのちの保育」ということなのである。そこで、積極的な生命尊重について二つの視点を確認しておきたい。それは次のような視点である。

①自分の能力や特性を最高に発揮しようとする視点

②保育者として子どもの可能性を十分に伸ばそうという視点

(1)自分の能力や特性を最高に発揮しようとする視点

人はいつか必ず死ぬ生きものである。しかも、「その日」がいつ自分に訪れるかを知ることができないし、自分で決めることもできない。だからこそ、せっかく授かった(すでに述べたように、人として生まれる確率が非常に小さいからである)「いのち」を、終わりの日が来るまで悔いのないように精一杯生きようとするのが大切ではないだろうか。

(2)同様のことは保育者が接する乳幼児についてもあてはまる。スイスの生物学者ポルトマンが「人間は生理的な早産」と指摘したように、ヒトの赤ちゃんは非常に未熟な状態で産まれるため、相当な期間にわたって保護する必要がある。しかし、誕生後の成長はおどろくほど速い。また、その際の環境(人的環境・物的環境・自然環境等)によって成長の方向性も大きく異なってしまうのである。

しかも、赤ちゃんはさまざまな「伸びていく可能性」を秘めて誕生するので、その可能性の芽を発見することとスムーズに伸びるための環境を提供することが重要なのである。

この二つの視点については以前に「保育者を目指す学生に対する生命尊重教育の必要性について」と「少子化時代の保育者養成と生命尊重教育の必要性」で詳しく紹介したので参照してほしい。<sup>(註1)</sup>

いずれにしても、私たちが考えなくてはいけないことはこの二つの視点ではないだろうか。そして、それをどのように保育科の学生に認識してもらおうかが重要なのである。

- (註1) 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄編『分数ができない大学生』(東洋経済新報社1999年)
- (註2) 秋葉英則『エミールを読みとく』(清風堂書店出版部…2005年発行)
- (註3) 拙稿「保育実習指導で見えてきた保育科学生の問題点と保育者養成」(『育英短期大学研究紀要』第34号…2017年)
- (註4) 和田修二『改訂版教育的人間学』(放送大学教育振興会…2000年2月)
- (註5) 拙稿「子どもを授かる」(『月刊仏教保育カリキュラム』2016年6月号…日本仏教保育協会発行)
- (註6) 拙稿「人間教育の原点としての仏教保育について」(『育英短期大学研究紀要』第14号…1996年)
- (註7) 田中孝彦『保育の思想』(ひとなる書房…1998年発行)
- (註8) 中村『死を通して生を考える』(リヨン社…2006年発行14ページ)
- (註9) このことに関しては、竹山道夫『ヨーロッパの旅』(新潮文庫…1968年発行)に興味深い記述がある。
- (註10) 同様の考えは藤武(滋賀大学教授)も指摘している。「(仏教の精神と生命尊重保育の実践) 日本仏教保育協会編『生命尊重の保育とは』22ページ…鈴木出版社1986年)
- (註11) 拙稿「保育者を目指す学生に対する生命尊重教育の必要性について」(『育英短期大学研究紀要』第33号…2016年)、「少子化時代の保育者養成と生命尊重教育の必要性…人間学としての保育学確立に向けて…」(『育英短期大学研究紀要』第35号…2018年)

(さとう たつぜん・育英短期大学教授)